

平成 20 年度 自己点検評価書

海浜台地生物環境研究センター

1. 研究センターの目的・目標

佐賀大学海浜台地生物環境研究センターは、平成 15 年に設立された学内共同研究教育施設である。当センターの目的は、佐賀県北西部の上場台地、玄界灘を中心とした島嶼域ならびにその浅海沿岸域を主な対象として、そこに展開される農林水産業の発展かつ安全な食糧の持続的生産技術、浅海域での生物環境資源を保全と未開発生物資源の開発・探索に関わる研究を実施し、また、自然環境を含めた山―農地―河川―浅海の生態システムにおける相互作用に関する総合的研究に基づく環境保全と資源循環型社会の確立に資することである。

2. 研究センターの構成

<施設>

センター敷地面積	4,800 平方メートル
研究棟延床面積	810 平方メートル
ガラス温室面積	140 平方メートル
実験圃場面積	900 平方メートル
現地圃場面積 (唐津市神田)	5,429 平方メートル

<教員・スタッフ>

センター長 有馬 進 (兼任, 農学部教授)
副センター長 小林 恒夫 (専任, 教授) ・ 長 弘幸 (兼任, 農学部教授)

・専任教員

教授 田中 明 (環境情報学)
教授 小林 恒夫 (環境社会学)
准教授 亀井 勇統 (浅海域生物資源学)
准教授 鄭 紹輝 (生産生態学)

・客員研究員

長嶋 俊介 (鹿児島大学教授)

・非常勤研究員

田村 善弘

・研究支援推進員

山口 和宏

・非常勤職員

木下たかね

3. 領域別の自己点検評価

(1) 教育の領域

ア 教育目標・成果に関する事項

大学院教育において、鹿児島大学連合農学研究科博士課程ならびに佐賀大学大学院農学研究科修士課程に加わり、センターの研究目標を題材とした教育を目指す。平成 20 年度においては、博士課程学生 1 名と修士課程学生 5 名の研究指導を行った。

<農学研究科修士課程 担当科目>

海浜台地生産機能学 (田中明、後期、農学研究科)
海浜台地政策学特論 (小林恒夫、前期、農学研究科)
Advanced Agricultural Policy (小林恒夫、前期、農学研究科)

作物生産学特論（鄭、前期、農学研究科）
Plant Production Science（鄭、前期、農学研究科）
海洋生物資源化学特論（亀井勇統、後期、農学研究科）
作物生態生理学特論（有馬進、後期、農学研究科）
特別演習（全教員、通年、農学研究科）

イ 教育内容・活動に関する事項

大学院教育について、農学研究科に所属する修士課程の学生、および鹿児島大学大学院連合農学研究科に所属する博士課程の学生には、下記の課題で研究指導を行った。また、博士・修士学生については、ティーチングアシスタントに採用して、学部学生を指導することで教育効果を高めている。

◆博士学生

ロドリゲス ホルメス：コロンビアにおける小規模農家に対する青果物市場へのアクセス改善支援戦略に関する社会経済的研究（副査：小林恒夫）

◆修士学生

Rampathige Indika Ruwan Prasanna：Economical effects of rural resources circulation system initiated by food processing industries in Sri Lanka（小林恒夫）
Md. Monjurul Hoque：Constraints and development conditions of Bangladesh rural dairy sectors（小林恒夫）

太田美加：厨芥由来の廃棄バイオマスを用いた養液栽培システムの開発（有馬進）

寺崎農：低コスト小型バイオガスプラントに関する研究（有馬進）

富永晃好：ABA関連変異体の単離・解析及びABAが共生窒素固定に与えるメカニズム（有馬進）

【評価】大学院生の教育指導内容はおおむね当センターの設置目的に沿っている。本年度は本センターの直属の博士課程の学生はいなかったが、修士課程の学生は積極的に受け入れ、センターの教育機関としての目標をおおむね達成している。ただし、学生の個別指導を停止中の教員については、個別指導再開に向け善処する必要がある。

ウ 入学、卒業等に関する事項

該当事項なし

エ 教育環境に関する事項

昨年度まで指導教員（研究室）毎に、学生を配置していたためにセンター内における学生間の交流がほとんど無かったが、本年度から2階に学生室を設けて、学生間で十分なコミュニケーションを確保できるように改善した。

オ 学生支援に関する事項

該当事項なし

カ その他教育に関する事項

センターの教員は農学部および全学共通教育の講義を行っている。また、各教員において農学部の生物環境科学科と緊密に連携し、4年次学生の卒論研究指導の委託も引き受けた。平成20年度において、8名の学部学生の卒業研究を指導した。各学生の研究課題は下記通りである。

<農学部・全学教育 担当科目>

環境業水利学（田中明、前期、農学部）
水気圏環境実験（田中明、通年、農学部）
生物環境保全学概説（田中明、後期、農学部、分担）
地域農業組織論（小林恒夫、前期、農学部）
半島・島嶼産業論（小林恒夫、後期、農学部）
農業政策論（小林恒夫、後期、農学部）

地域社会開発学概論（小林恒夫、後期、農学部、分担）
フィールドワーク基礎演習（小林恒夫、後期、農学部、分担）
海洋生物資源化学（亀井勇統、前期、農学部）
栽培技術論（鄭、前期、農学部）
資源循環生産学概説（鄭・有馬、後期、農学部、分担）
作物生産学（有馬進、後期、農学部）
食用作物学（有馬進、後期、農学部）
作物学演習Ⅰ・Ⅱ（有馬進前期・後期、農学部）
作物学実験実習Ⅰ・Ⅱ・（有馬進・前期・後期、農学部）
生物科学実験実習（有馬進・鄭紹輝 他、前期、農学部）
栽培植物の世界（有馬進・鄭紹輝、後期、全学部）
その他、3科目

◆学部学生（センター教員担当）

前田瑛里：鳥獣被害の現状と防護対策の課題（指導教員：小林）
丸田裕貴：ハイスミかんに関する考察（指導教員：小林）
満行孝一：酒造メーカーにおける杜氏の性格変化に関する研究（指導教員：小林）
孫 明順：ダイズの胚軸根形成と根粒着生の品種間差異（指導教員：有馬）
吉田 顕：水生作物ヒシへの温暖化の影響ならびに汽水栽培の可能性について（指導教員：有馬）
青柳祐樹：ダイズ子実肥大期における土壌窒素の供給が葉の老化に及ぼす影響（指導教員：鄭）
筒井麻美：九州北西部の雪の成分について（指導教員：田中）
宮田佳枝：松原整備に伴う廃棄物の有効利用（指導教員：田中）

【評価】学部・全学教育にも積極的に関与して、センターに配属される修士課程学生の増員につなげるとともに、センターの教育的効果を高めている。

(2) 研究の領域

ア 学術・研究活動に関する事項

沿岸台地と浅海域における生物生産ならびに生物環境資源の保全および有用資源の開発利用を基本理念に研究を行った。すなわち、「海浜台地農林水産受託研究」（唐津市委託）、「有明海生物生息環境の俯瞰型再生と実証試験」（文部科学省科学技術振興調整費、分担）、をはじめ、他大学・公的研究機関、民間企業との共同研究や学術振興会科学研究費による研究プロジェクトを実施した。具体的な研究課題としては、高品質の地域特産物の栽培技術および有用成分分析、浅海域生物（海藻）の機能性成分の探索とその応用実験、沿岸陸域における水・土・気象条件の特徴の解明、海岸林（虹ノ松原）の保全技術に関する研究、および沿岸の陸域・海域両方の資源を共に有効利用している半島・島嶼産業の持続的利用システムの開発などである。

(A) 研究事項

＜生産生態学分野＞

・台地作物の機能性開発と生産技術の確立、・持続型農業技術の開発、・海浜地域の水産加工関連廃棄物の農業利用

＜浅海域生物資源学分野＞

・海洋生物由来の有用活性物質の探索・応用、・海藻資源の医薬品開発、・海藻遺伝資源の保存と分子育種

＜環境情報学分野＞

・沿岸陸海域の環境情報収集と活用、・沿岸陸域と海域の相互作用解析、・海岸林の保全育成、・高品質作物栽培のための希薄海水灌漑

<環境社会学分野>

- ・玄海域を中心とした島嶼の産業と島民生活の持続的展開条件に関する研究,
- ・上場台地の農業展開の歴史的性格を示す「肥前杜氏」集団の歴史研究

(B) 主な研究成果

<生産生態学分野>・上場地域における環境保全型農業技術, ・水産加工廃棄物の有効利用, ・サツマイモのポリフェノール含量を高める栽培条件の解明, ・マメ科作物の登熟特性解明, ・佐賀県西北部における特産農産物の導入に関する研究推進.

<浅海域生物資源学分野>・分離海洋細菌 *Streptomyces* sp. AP77 株由来の β -1, 3-グルカナーゼの β -1, 3-グルカン分解における至適活性条件の解明等を基礎とした海苔病害の防除, 耐病性海苔種苗の生物工学的作出に関する研究推進.

<環境情報学分野>・上場台地及び沿岸農地における環境資源の有効利用, ・希薄海水灌漑による高糖度トマトの栽培システムに関する研究, ・海岸松林の松葉の有効利用に関する研究, ・松葉炭による水質浄化及び土壌改良効果, ・海岸林における松露など菌類の研究, ・海岸林における堆積有機物の利用に関する研究 等の推進.

<環境社会学分野>・玄界域島嶼の農業・水産業の持続的発展に関する研究, ・「肥前杜氏」集団の盛衰と東松浦半島(上場台地)農業の展開に関する研究推進.

【評価】 センターの専任教員がそれぞれの専門性を活かして海浜・台地における資源の有効活用と保全に関する試験研究を実施している。ただし、個別的に研究を実施している状況を長く続けていることから、各教員間の連携が不十分であり、部門間の協働による地域に還元可能な学際的・総合的な成果が望まれる。

イ 研究環境に関する事項

a) スタッフの充実

- * 客員研究員を配置している。
- * 非常勤研究員, 研究支援推進員各 1 名を配備している。
- * 下記大学・公立研究機関・企業との共同研究を推進している。
九州大学, 鹿児島大学, 宮崎大学, 東北大学, 大阪府立大学, 東京海洋大学, 専修大学, 九州沖縄農業研究センター, 佐賀県各農業研究機関, 肥前町杜氏組合

b) 研究設備の整備

- * 現有設備の運転, 管理を徹底し, 研究に活用している
- * 学内他の部局からの共同利用を進めている
- * 研究のニーズに応じ, また研究の質的向上を図るために, 新設備の整備を図っている

c) 研究資金の獲得

- * 佐賀県, 唐津市からの委託研究経費を獲得している
- * 日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員経費)を獲得している
- * 民間から研究資金を獲得している
- * 日本学術振興会科学研究費補助金を含め, 各種研究助成金の申請を積極的に行っている。

【評価】 委託研究資金, 民間資金ならびに日本学術振興会科学研究費補助金を獲得などにより, 研究支援体制を整えている。今後センター研究活動の活性化には, さらに研究体制の充実を図り, 大型新規プロジェクトの獲得に努力する必要がある。

ウ その他研究に関する事項

海浜台地生物環境研究センターでは, 雑誌 *Coastal Bioenvironment* を 2 回 (Vol. 11, 12) 発行し, 研究成果の外部への公表に努めた。また, 各分野においては, 各所属学会への研究成果発表, 論文の掲載を通じて, 研究成果を積極的に国内外に公表した。

◆平成 20 年度の研究成果一覧

(1) 論文

- 1) 小林恒夫：「肥前杜氏」集団メンバー（杜氏と蔵人）の動向と地域農漁業. *Coastal Bioenvironment* 11: 1-15, 2008
- 2) 小林恒夫：佐賀県東松浦半島（上場台地）茶産地における地域農業再編構想—茶と稲の「集落営農」組織化の提案—. *Coastal Bioenvironment* 12: 1-20, 2008
- 3) 鄭紹輝, 山崎菜穂子, 中元博明, 吉門方子, 有馬進. 2008. カンショ塊根のポリフェノール含量と栽培環境の関係. *Coastal Bioenvironment* 11: 37-42.
- 4) Imamura, M., Yuasa T., Takahashi T., Nakamura N., Htwe N. M. P. S., Zheng, S. H., Shimazaki K. and Iwaya-Inoue M. 2008. Isolation and characterization of a cDNA coding cowpea (*Vigna unguiculata* (L.) Walp.) calcineurin B-like protein-interacting protein kinase, *VuCIPK1*. *Plant Biotechnology* 25: 437-445.
- 5) Kashiwagi, J. Krishnamurthy, L. Gaur, P. M. Umezaki, T. Zheng, S. H., Hiraoka, Y., Terauchi, T. and Iwama, K. 2008. Genotype-environment Interaction in Chickpea (*C. arietinum* L.) for Adaptation to Humid Temperate and Semi-arid Tropical Environments. *Tropical Agriculture and Development* 52: 89-96
- 6) 鄭紹輝, 中元博明, 有馬進. 2008. ヘアリーベッチおよび赤クローバによる土壌窒素の補給効果. *Coastal Bioenvironment* 12: 41-46.
- 7) 小石澤隼・亀井勇統：分離海洋細菌 *Streptomyces* sp. AP77 株由来の β -1, 3-グルカナーゼの β -1, 3-グルカン分解における至適活性条件. *Coastal Bioenvironment* 11, 27-35, 2008
- 8) 小石澤隼・亀井勇統：分離海洋細菌 *Streptomyces* sp. AP77 株由来 β -1, 3-グルカナーゼのノリ赤腐れ病原真菌 *Pythium porphyrae* に対する溶解解析. *Coastal Bioenvironment* 12, 33-40, 2008
- 9) 田中明：水蒸気灌漑法による作物栽培. *Coastal Bioenvironment*, 10, 25-30, 2008
- 10) 田中明・北村憲子：九州北西部における雪の成分について. *Coastal Bioenvironment*, 10, 25-30, 2008
- 11) Akihiro Suzuki, Hisatoshi Hara, Tomoyo Kinoue, Mikiko Abe, Toshiki Uchiumi, Ken-ichi Kucho, Shiro Higashi, Ann M., Susumu Arima. Split-root study of autoregulation of nodulation in the model legume *Lotus japonicus*. *J Plant Res.* 121:245-249. 2008
- 12) Akihiro Suzuki, Kenji Yamashita, Mami Ishihara, Ken-ichi Nakahara, Mikiko Abe, Ken-ichi Kucho, Toshik Uchiumi, Shiro Higashi, Susumu Arima. Enhanced symbiotic nitrogen fixation by *Lotus japonicus* containing an antisense β -1,3-glucanase gene. *Plant Biotechnology* 25,357-360, 2008
- 13) 鄭紹輝・山崎菜穂子・中元博明・吉門方子・有馬進
カンショ塊根のポリフェノール含量と栽培環境の関係、*Coastal Bioenvironment* Vol.11. 37-42, 2008
- 14) 有馬進・鈴木章弘・鄭紹輝・奥菌稔・西村巖：ミシシッピーアカミミガメのハス食害調査、*Coastal Bioenvironment* Vol.11. 47-54, 2008

(2) 学会発表

- 1) 田中明(2008)：水蒸気灌漑による作物栽培法、日本砂丘学会全国大会
- 2) 岩本真二、田崎宣幸、世戸直明、田中明(2008)：松原の腐植土を利用した法面緑化について（第1報）、日本農業農村工学会九州支部大会、2008

- 3) 田中明：虹の松原保全・再生対策の基本方針について—白砂青松再生100年計画—、日本海岸林学会全国大会、2008
- 4) H. Nakamoto, S. H. Zheng (2008): Changes in nitrogen and soluble protein in soybean leaves during seed filling. 5th International Crop Science Congress. 2008.4, Jeju, Korea.
- 5) 高橋 幹, 中元 博明, 中野 恵子, 森田 敏, 北川 寿, 中野 洋, 鄭 紹輝 (2008) : 地下灌漑システム「FOEAS」による地下水位制御が暖地ダイズの生育, 収量, 品質に及ぼす影響. 日本作物学会第226回講演会, 2008年9月, 神戸
- 6) Nang Myint Phyu Sin Htwe, 湯浅 高志, 谷川 宏行, 石橋 勇志, 鄭 紹輝, 井上 眞理 (2008) : 摘莢処理にともなうダイズ青立ち現象に関与する遺伝子発現の解析. 日本作物学会第226回講演会, 2008年9月, 神戸
- 7) 亀井勇統・小石澤 隼 (2008): 耐病性ノリ種苗の生物工学的作出の検討・29 *Streptomyces* sp. AP77 株由来 β -1,3-グルカナーゼの β -1,3-グルカン分解における至適活性条件の検討, 平成20年度日本水産学会春季大会
- 8) 亀井勇統・小石澤 隼 (2008): 耐病性ノリ種苗の生物工学的作出の検討・30 *Streptomyces* sp. AP77 株由来 β -1,3-グルカナーゼの *Pythium porphyrae* 溶解の解析, 平成20年度日本水産学会春季大会
- 9) Tsang C. K., A. Ina, & Y. Kamei (2008) : Novel Neuroprotective Agents, Sargaquinoic Acid and Sargachromenol Found in the Marine Brown Alga, *Sargassum macrocarpum* and Its Potential Application for Alzheimer's Disease. International Conference of Advanced Research on Marine Bioresources.
- 10) Kamei Y. & Y. Ohtsuka (2008) : Melanin Synthesis Inhibiting activity of MC20 isolated from a Marine Red Alga, *Calliarthron yessoense* in B16 Melanoma Cells. The World Congress on In Vitro Biology
- 11) Tsang C. K., A. Ina, & Y. Kamei (2008) : Novel neuroprotective agents isolated from the marine brown alga, *Sargassum macrocarpum* and its potential application for neurodegenerative diseases. 3rd Congress of the International Society for Applied Phycology and the 11th International Conference on Applied Phycology.
- 12) Kamei Y. & J. Koishizawa (2008): Possibility of use of fungal lytic enzyme to protect against red rot disease of *Porphyra yezoensis* (Nori) instead of using acids in marine environment. The International Symposium on Lowland Technology 2008.
- 13) Kamei Y. & J. Koishizawa (2008): Fungal Lytic Enzyme Produced by the Marine Bacterium *Streptomyces* sp. AP77 against *Pythium porphyrae*, the Causative Agent of Red Rot Disease of *Porphyra yezoensis* (Nori). 5th World Fisheries Congress.
- 14) 有馬進・鈴木章弘・鄭紹輝(2008): 水生作物ハスに対する外来種ミシシッピーアカミミガメの脅威(予報)、第85回日本作物学会九州支部講演会
- 15) 有馬進・吉田顕・鈴木章弘・稲葉繁樹・鄭紹輝(2008): 水生作物ヒシへの温暖化の影響ならびに汽水栽培の可能性について、第85回日本作物学会九州支部講演会

(3) 報告書、その他

- 1) Coastal Bioenvironment Vol.11 2008
- 2) Coastal Bioenvironment Vol.12 2008
- 3) 平成20年度唐津市受託研究「海浜台地農林水産受託研究報告書」

【評価】研究活動は活発に行われているが、本センターの研究内容の地域へのアピールと成果の還元にも力を入れる必要がある。また、佐賀大学内部ならびに一般への成果報告の取り組みが遅れており、法人から「成果が見えない」と酷評されている。そのため、HP等での

成果公表が急務である。

(3) 国際交流・社会貢献の領域

ア 大学、職員及び学生の国際交流に関する事項

地域を対象とした研究であってもその質的向上を目指し、各分野は常に世界での研究動向を把握する必要がある。そのため、海外に動向調査や、海外研究者との交流を行った。また、自身の研究成果を国際学会やシンポジウムに積極的に発表した。

◆平成 20 年度の教員海外渡航

小林恒夫：鹿児島連合農学研究科国際シンポジウム、2009. 3月25～31日、インドネシア
亀井勇統：

- ①台湾国立海洋大学生命科学院「先端的海洋生物資源研究に関する国際会議に招待公演」
2008. 5月7日～10日、台湾
 - ②インビトロバイオロジー世界大会 2008. 6月14～21日、米国
 - ③応用藻類学国際会議 口頭発表 2008. 6月22～28日、アイルランド共和国
 - ④帰国外国人留学生研究指導 2008. 8月21～30日、インドネシア
 - ⑤低平地に関するシンポジウム 口頭発表 2008. 9月23～27日、大韓民国
- 鄭 紹輝：世界作物会議 2008年4月16日～19日、大韓民国、済州市
有馬 進：世界作物会議 2008年4月16日～19日、大韓民国、済州市

【評価】国際交流について、海外調査、国際学会などを通じて活発に活動している。また、今年度は、帰国した留学生の指導も実施するなど、教育的な交流にも成果があった。

イ 研究・教育における社会連携・貢献に関する事項

センターが立地する地域の環境をテーマにしたシンポジウム、環境研究会、虹の松原を保護する活動などを通じて、地域住民に活動を行った。また、九州北部地域の酒造りを担う「肥前杜氏」に関する研究とシンポジウムを実施した。さらに、島嶼問題にも積極的に取り組んだ。地域研究センターとしては、地域の問題点を取り上げ、その問題解決を目的として研究を取り込んでいる。具体的には、地元の唐津市より毎年委託研究を引き受けた。

◆センター教員の社会的諸活動

有馬進センター長

- 2001～現在 佐賀県農業大学校非常勤講師
- 2004～現在 佐賀県農作物奨励品種選定委員会副委員長
- 2006～現在 日本作物学会評議員
- 2007～現在 日本雑草学会評議員
- 2006～現在 九州雑草研究会会長
- 2007～現在 日本作物学会九州支部会長

田中明専任教員

- 2006～現在 日本海岸林学会評議員
- 2006～現在 日本砂丘学会評議員
- 2006～現在 唐津市環境審議委員会委員
- 2006～現在 日本緑化センター「海岸林の整備・保全手法に関する検討会」メンバー
- 2006～現在 唐津市うみ・やま・かわ環境調和のまちづくり事業審査委員

小林恒夫専任教員

- 2005～現在 まつら環境問題研究会会長

亀井勇統一専任教員

- 1999～現在 佐賀県環境影響評価審査会委員
- 2000～現在 日本動物細胞工学会評議員

2003～現在 日本動物細胞工学会幹事

鄭紹輝専任教員

2008～現在 日本作物学会「Plant Production Science」誌編集幹事

2007～現在 日本作物学会九州支部会評議員

2007～現在 日本作物学会九州支部会庶務幹事

2004～現在 佐賀県農業試験研究評価委員

◆シンポジウム等

- ・シンポジウム「佐賀=『肥前杜氏』の現在・過去・未来」2008. 4月19日 本研究センター
- ・日本作物学会九州支部 特別講演会 「温暖化と九州域の作物生産」 2008. 8月20日 熊本県立大学
- ・離島活性化の取り組み
離島振興講演会「佐賀=唐津離島の地域特性—大学・関係機関による長期的関与戦略—」
2008. 3月13日 本研究センター
離島振興講演会「小川島文化ルネサンスと地域振興」2009. 3月14日小川島老人憩の家
離島振興講演会「向島の地域振興と新海士・海女ツーリズム」2009. 3月15日 向島小中学校
- ・環境保護の取り組み
@虹ノ松原 保全プロジェクト（年間を通じての活動指導と支援）
虹ノ松原再生保全活動（指導：田中明）
虹ノ松原七不思議の会（指導：田中明）
虹の松原保護対策協議会（指導：田中明）
唐津防災推進機構（指導：田中明）
唐津塾（講師：田中明）
@佐賀城お堀のハス再生プロジェクト（地域資源再生・外来種駆除 関係）
平成20年4月～8月 ミシシッピーアカミミガメの食害調査
平成20年4月～10月 ハス再生プロジェクト第1回～第5回打合せ会議
ならびに実践活動
(佐賀大・佐賀県・佐賀市・佐賀城周辺自治会・佐賀植物友の会・
佐賀自然史研究会・赤松小学校・循誘小学校・森と海を結ぶ会、
トンボ研究会 他)

「佐賀城お堀のハス再生プロジェクト」報道

社名	年月日	タイトル
読売新聞	2008. 4. 10 (木)	佐賀城ハス全滅
	2008. 4. 11 (金)	佐賀城ハス全滅 外来種カメ食害か
	2008. 5. 3 (日)	佐賀城公園のハス消滅, “犯人”の北米原産カメ捕獲
	2008. 5. 29 (木)	佐賀城ハス全滅 カメ食害を確認 佐賀大実験
佐賀新聞	2008. 5. 2 (土)	ハス消滅の犯人はカメ?
	2008. 5. 20 (火)	佐賀城公園 外来種カメの食害確認
朝日新聞	2008. 5. 24 (土)	ハス消えた 犯人は
テレビ朝日	2008. 4. 16 (土)	スーパーモーニング
九州朝日放送	2008. 5. 26 (月)	ニュースピア お堀のハスはどこへ
	2008. 5. 27 (火)	KBC ホームページムービーお堀のハスはどこへ

(テレビ朝日は全国版, 新聞と九州朝日放送は地域版)

【評価】 地域での研究実践・活動・交流会を開催し, センターの目的に則した地域貢献への

配慮がなされている。

エ 大学開放・情報発信に関する事項

- ・研究センターの趣旨，研究内容を市民に公開し，理解してもらうために，4月19，20日オープンキャンパスを行い，多くの市民との交流を図った。
- ・研究センターのホームページをセンター内で更新出来る体制を整えたが，その内容と更新操作についての習熟度を増す努力が望まれる。

【評価】 オープンキャンパスではおおむね目的が達成されているが，事前の広報等に工夫が必要である。また，本センターのホームページにおいて研究情報や活動内容を常に発信する体制は確保された。今後，よりよいHPをつくる努力が望まれる。

オ その他国際交流・社会貢献に関する事項

留学生，海外研修生を積極的に受け入れた。また，研究成果を地域に紹介し，普及を図るとともに，地域の問題点を聞き，その解決に向けての助言を行った。

◆平成20年度に受け入れた海外研修生

1) 研究生の受入

- ①氏名：アハメド・ジュナエド・ウッディン (AHMED JUNAYED UDDIN)
国籍：バングラデシュ 指導教員：小林恒夫 期間：2008. 10月～2009. 3月
- ②氏名：ファテチン
国籍：インドネシア・指導教員：鄭紹輝 期間 2008年10月～11月

2) 留学生の受け入れ

- ①氏名：アハメド・ジュナエド・ウッディン (AHMED JUNAYED UDDIN)
国籍：バングラデシュ 指導教員：小林恒夫 (2008年4月～)
- ②氏名：趙 鑫
国籍：中華人民共和国 指導教員：鄭紹輝 (2009年4月～)
- ③氏名：ファテチン (Fatichin)
国籍：インドネシア 指導教員：鄭紹輝 (2009年4月～)

3) 海外研究者の受入

氏名：ファチチン (Fatichin)
国籍：インドネシア (Jenderal Soedirman 大学講師)
指導教員：鄭紹輝 (2008年12月～2009年3月)

【評価】 本センターとしては，海外情勢を踏まえながら「地域に貢献する大学」という姿勢で活動した。

(4) 組織運営の領域

ア 教育研究組織の編成・管理運営に関する事項

該当事項なし

イ 財務に関する事項

財源については，大学運営交付金以外に，積極的に各種研究資金に応募し，財源獲得に努力している。また，経費節約，刊行物購入の総点検，及び研究報告の希望者への限定的配付などにより，経費の削減に努めた。

【評価】 固定経費と経常経費の節約が図られ，おおむね予算範囲内の執行ができています。

ウ その他組織運営に関する事項

a) センターの重要な運営事項については，センター運営委員会，センター専任教員会議，研究報告編集委員会などをもって運営した。そのうち，日常的な諸問題は，センタ

一専任教員会議で処理し、組織運営の円滑化を図った。

b) センターの活動状況を整理・記録し、平成 20 年度活動実績報告書を公表した

【評価】 センターの重要事項の運営や日常的な管理はおおむねスムーズに行われている。

(5) 施設の領域

ア 施設、設備等の整備状況に関する事項

定期的にメンテナンスを行った。また、一般設備については、建物を含む安全管理、清掃、排水などすべて基準に従って行った。

【評価】 既存設備はほぼ順調に稼動している。

イ 施設、設備等の利用状況に関する事項

当センター内の研究設備は研究目的に応じて分担管理されている。また、当センターは学内共同利用施設であり、センターの施設・設備は、学内はもとより、共同研究など連携のある他の機関からの利用もあった。平成 20 年度では、佐賀大学文化教育学部、佐賀大学農学部、九州大学および佐賀県上場営農センターなどの機関の教員・学生・職員、また、唐津市の地元企業からの利用があった。

【評価】 既存設備をおおむね研究に活用しているが、学内共同利用施設としては、他の学部・研究施設にもっと利用されやすいよう改善する必要がある。

ウ その他施設、設備等に関する事項

該当項目なし。

以上。